『中国地区英語教育学会研究紀要』No.27. (1997.11.5)

日本語の Topic-Comment 構造の転移に関する研究の概観

安田女子大学　山 川 健 一

1　はじめに

日本人英語学習者（以下、学習者）が英文を産出する際に、日本語の Topic-Comment 構造[1]（以下、T-C 構造）が言語転移するということは、多くの先行研究において報告されている（Schachter & Rutherford 1979; Rutherford 1983; Zobl 1989; Sasaki 1990; 松井 1979; 小寺 1989; 松岡 1992, 1993a, 1993b, 1995; 築道 1995)。これらの先行研究にみられる、日本語の T-C 構造が影響を与えたとされる英文構造（または誤り）は、次の３つ（A～C）に類型化できる。

A　Putative Passive

(1) *Most of food which is served in such restaurant have cooked already.
(been cooked)
(Schachter & Rutherford 1979)（下線部筆者、以下同様）

(2) *I think the trade imbalance have to improve.（松岡 1993a)
(be improved)

B　Extraposition

(3) It's the best way to talk in Japanese for us.

(4) *It is so changing everything now.　（ともに Zobl 1989)
(Everything is changing now.)

C　－ be － 型

(5) *My family is seven.
(There are seven people in my family.)

(6) *Today was track and field events.（ともに 築道 1995)
(We had track and field events today.)

Aの Putative Passive は、「受動態のなりそこない」のように見える構造である。(1)と(2)の下線部は、受動態にならなくてはならない。これらは、日本語の T-C 構造とは一見無関係のようであるが、後述するように、T-C 構造の言語転移であると説明されている。Bの Extraposition は、It is ...to(that)... などの外置文を過剰表出（overproduction）するものである。結果的には、文法的なものもあれば、非文法的なものが生じる可能性もある。(3)と(4)ではそれぞれ、主語の位置にあった名詞句（to talk... と everything）が外置されたものである。Cの「－ be － 型」は、日本語の「～は～」の型に影響され、その結果、be 動詞では連結できないものをつなげ

たものである。

本論文の目的は、上述した日本語の T-C 構造が影響したとされる英文構造（誤り）に関して、先行研究ではどのような解釈・分析がなされているかを概観し、それらを批判的に再検討するものである。以下、第 2 節では、Putative Passive と Extraposition について、第 3 節では、「－ be －型」について論じる。

2 Putative Passive と Extraposition に対する分析

2.1. Schachter & Rutherford（1979）と Rutherford（1983）の分析とその問題点

学習者による Putative Passive や Extraposition の過剰表出が、L1 の言語類型的特徴の言語転移によるものであると最初に唱えたのが、Schachter & Rutherford（1979）であり、この研究は、第 2 言語習得理論の概論書でも一定の評価を得ている（Ellis 1985, 1994; Larsen-Freeman & Long 1991; Gass & Selinker 1994）。彼らは、Putative Passive は受動態の誤りとは考えず、その主語は実は文の主題を表わしているとし、例文(7)や(8)のように、they や one などの論理的主語を補ったり、また、本来目的語の位置にあった主題を目的語の位置に戻して（この場合は it や them）考えてみると分かりやすいと述べている。

(7) *Most of food which is served in such restaurant have cooked already.
(As for) (they) (it)

(8) *...but rational emotions must use for judging.
(as for) (one) (them)

以上をふまえ、(7)と(8)を日本語に直訳すると、「そのようなレストランで出されるほとんどの食物<u>は</u>すでに調理してある」と「理性的感情<u>は</u>判断のために用いなければならない」にそれぞれなり、日本語の T-C 構造を直訳したものであることがわかる。この分析によると、この誤りは柴谷（1978）の言う、代行の「は」[2]の転移による直訳であると考えられる。

以上の説明は、ある程度の説得力を持つように思える。しかし、(7)や(8)を産出した学習者は、日本語の T-C 構造を転移させたのではなく、受動態の単なる文法的誤りの可能性も依然として否定できない。よって、学習者が(7)や(8)以外の部分で受動態をどの程度用いているのか、また、どの程度正しく受動態を使用しているかについても同時に調べ、総合的に判断する必要がある。

次に、(9)や(10)のような Extraposition の過剰表出[3]に関して、Schachter & Rutherford(1979)は以下のような説明をしている。

(9) ?The computer is called the "brain" because <u>it is</u> the very important thing <u>that</u> the computer can remember.

(10) ?<u>It is</u> a tendency <u>that</u> such friendly restaurants become less in the big city.

彼らは過剰表出の理由として、学習者が L2 におけるある形式（ここでは It is...that）と L1 におけるある談話機能（ここでは「一般的な事実や所信に関して一般的な意見を述べる」というもの）を結びつけたからであると主張している。つまり、学習者が(9)や(10)にみられるよう

な一般的な事柄を表現しようとしたとき、何らかの理由で It is...that の形式でいかなる場合も表現しようとしたためであるとしている。そして、(11)のような一般的な事柄でない出来事を表わすものに対しては、Extraposition を用いたものはみられなかったと報告している。

(11) It will be difficult to finish the composition.

一方、Rutherford (1983) では、Extraposition の過剰表出に関して、上述したものとは異なる説明がなされている。英語の形式主語の it は、文法的語順を維持するだけの機能しか持たず、典型的な GWO [4] の特徴であるとされる。そして、日本語は動詞が必ず文末にくるという点で部分的に GWO の言語であるので、学習者が英語の形式主語の it に敏感に反応してこれを多用したために過剰表出が生じたと説明されている。

次に、上述した Schachter & Rutherford (1979) と Rutherford (1983) の見解をそれぞれ検討してみる。Schachter & Rutherford (1979) では、Extraposition の過剰表出は、学習者が L1 の談話機能（この場合、「一般的な事実や所信に関して一般的な意見を述べる」）を L2 の表現構造（この場合、It is...that...）に転移させた言語類型的特徴の転移であると主張している。しかし、彼らの主張するこの談話機能の転移は、主題卓越言語である日本語の言語類型的特徴の転移とは、なんら直接的関係はない。なぜなら、「一般的な意見を述べる」という談話機能は、主題卓越言語特有のものではなく、主語卓越言語と主題卓越言語の両方に存在すると考えられるからである。よって、Extraposition の過剰表出は日本語の T-C 構造の影響であるという彼らの主張は成立しなくなってしまう。

Rutherford (1983) の解釈にしても、この論理では、verb-final の語順の L1 の学習者は日本人英語学習者と同様に Extraposition を多用することになるが、現在までそのような報告の研究もほとんどない [5]。また、彼の主張を拡張すると、日本語は GWO の言語であるだけではなく、PWO の言語でもあるので、学習者は旧情報ではない文頭の it に敏感に反応してこれを避けるはずであるともいえる。しかし、実際に学習者が Extraposition を多用している原因を、日本語が GWO の言語の要素を持っているせいだとするのには無理があるといわざるを得ない [6]。以上みてきたように、Extraposition の過剰表出に関しては、Schachter & Rutherford (1979) と Rutherford (1983) の解釈では、日本語の T-C 構造の転移の結果であるという主張は論理的基盤が弱いといえる。

2.2. Zobl (1989) の分析とその問題点

Zobl (1989) も、Putative Passive と Extraposition の過剰表出は、言語類型的特徴の言語転移であると説明しているが、Schachter & Rutherford (1979) や Rutherford (1983) らの解釈とは多少異なる角度から分析している。Zobl はまず、語順の観点から次の 2 つの言語類型 [7] を提案している。

A 階層型言語 (Configurational Syntax) の語順 [8]

語の配列が文法的に決定され、theme-rheme の要素の移動が自由である。

B Theme-Rheme 卓越言語の語順

語用論的な語順を基本とし、この中で語順が自由となる。

そして、この２つの言語類型の相違を表わす指標として、主題性の制約（Thematicity Constraint）を挙げている。主題性とは、「名詞句の指示対象を同定したり、他と区別して目立たさせることのできる容易さの程度[9]」(p.55) である。英語において語順は、主語や目的語などの文法的関係を表わすのに主に用いられるので、英語はＡの階層型言語であるといえる。よって、英語では、主題性の低い不定名詞句なども主語の位置にくることが可能であり、主題性の制約が低いと考えられる。一方、日本語はＢの Theme-Rheme 卓越言語であり、主語の位置に主題性の低い名詞句がくるのを避ける傾向があり、主題性の制約が高いといえる[10]。

Zobl は、Putative Passive や Extraposition の過剰表出は、日本語における主題性の制約の高さが転移した結果であると分析している。

(12) *Most of food which is served in such restaurant have cooked already.
(As for) (they) (it)

(13) *It was strange everything. (Everything was strange.)

(14) ?It is one of the most important things in my life to hold childlike mind.
(One of the most important things in my life is to hold childlike mind.)

例文(12) は Putative Passive の例であるが、この文の論理的主語の they はそのレストランの不特定の調理人を指すので主題性が低くなり、主題性の制約により、日本人にとっては they を文の主語にもってくることに抵抗を感じてしまう。よって、それよりも主題性の高い Most of food... を主語の位置に置いたと説明されている。(13)や(14)の everything や one も同様に主題性が低いので主語の位置に置かずに後方に移動され、英語では必ず主語を必要とするので主語の位置を埋めるものとして it が用いられたと分析されている。要するに、学習者は英語の語順を決定する際に、主語の位置にくる名詞句の主題性に配慮して決定しているといえる。

Zobl の説明は、主題性の制約という単一の概念で、Putative Passive と Extraposition の過剰表出の２つの現象を説明しているという点で、説明力が高いといえる。次に、この主題性の制約を用いた解釈の妥当性について以下検討してみる。例文(15)～(17)は、いずれも文法的ではない。

(15) *大勢の人<u>は</u>パーティーに来ました。

(16) *雨<u>は</u>降っています。

(17) *背の高い男<u>は</u>街角に立っている。

主題性の制約によると(15)～(17)は、文頭（主題の位置）にある名詞句（「大勢の人」「雨」「背の高い人」）が、主題性が低いので非文法的ということになる。よって、Zobl の唱える主題性の制約は実際に日本語においてみられるようである。しかし、(15)～(17)の文頭の名詞句に付く「は」を「が」に替えると文法的な文になり、主題性の制約は少なくとも部分的にしか成立しないことになる。

(15)′ 大勢の人<u>が</u>パーティーに来ました。

(16)′ 雨<u>が</u>降っています。

(17)′ 背の高い男<u>が</u>街角に立っています。

係助詞の「は」は、文脈の中で旧情報である名詞句に対して用いられ、一方、格助詞の「が」は新情報である名詞句に対して使用される。よって、「が」は「は」よりも主題性の低い名詞句とも結びつきやすいことが考えられるので、(15)′～(17)′は文法的になる。また、(13)を和訳する際に「が」を用いると文法的な文になり、やはり主題性の制約は成立しなくなる。

(18)　あらゆるものが珍しかった。(cf. *あらゆるものは珍しかった。)

以上見てきたように、日本語において主題性の制約は、「は」を伴う名詞句を含む「主題－解説」構造においては成立するが、「が」を伴う名詞句を含む文では成立しない。よって、日本人英語学習者は主題性の低い名詞句を文頭に置きにくく感じるので、Putative Passive や Extraposition を過剰表出した、という Zobl の主張は強すぎることになる[11]。

3　「－ be － 型」に対する分析

この型の誤りは、松井（1979)、小寺（1989)、築道（1995）などで報告されている。本節では、最も詳細に分析を試みている築道（1995）について再考察をしてみる。この研究は、ある女子中学 3 年生の約 10 ヵ月にわたる英文日記（記録回数 128 回）のケーススタディであり、この英文日記において、日本語の T-C 構造の影響を受けているとされる英文には、以下のようなものが報告されている。

(19) *My family is seven.
(20) *Today was track and field events.
(21) *Summer vacation was from today.
(22) *I was yellow team.
(23) *The listening test was bad marks.

そして、これら誤文の特徴として、①動詞は be 動詞が中心である、②主題の位置にくる名詞句は三人称が中心である、③天候に関して T-C 構造を用いた誤りは少なく、it の使用が定着している、④ T-C 構造と S-P (Subject-Predicate) 構造との間で「ゆれ」がみられる、の 4 点を挙げている。

築道（1995）では、日本語の「～は～」という T-C 構造の言語転移が誤りの原因であると解釈している。しかし、全ての「～は～」という T-C 構造を直訳した英文が誤りになるわけではないし（例、「彼は大学生だ」　He is a university student.)、また、(19)～(23)の場合は日本語を直訳するとなぜ誤文になるかについての説明が十分なされていない。本節ではこの種の誤りを、「～は～だ」の構文の影響を受けた誤りとして再分析してみる。

日本語で「ＸはＹだ」という場合、ＸとＹの関係には次の 3 種類が考えられる（益岡・田窪 1992)。

A　ＸがＹの集合に属するもの
(24)　源氏物語は平安時代の作品だ。
B　ＸがＹと同一のものを指すもの
(25)　紫式部は源氏物語の作者だ。

C　XとYの間に直接的な論理関係が存在しないもの

(26)　(例　レストランでの注文の際に) ぼくはうなぎだ。

AやBの型において、「だ」は英語の連結詞 (copula) と同じ働きをしている。一方、例文(26)は文脈次第で、「ぼくはうなぎを食べる」や「ぼくはうなぎを釣る」などを意味する表現として用いられることから、Cの型の「だ」はAやBの場合とは異なり、「を食べる」や「を釣る」などの述語の代用をしていると考えられる[12]。本論ではCの型の文を、奥津 (1993) にならい「うなぎ文」と呼ぶことにする。築道 (1995) においてみられた誤りは、AやBの型における be 動詞の用法を過剰般化し、このうなぎ文の場合にも当てはめた結果生じたものと考えられる。この仮説によると、上記の誤り(19)～(23)の日本語訳 (うなぎ文) と、述語が代用される前の日本文は以下のようになる。

(19)′　私の家族は7人だ。
(19)′′　私の家族は7人いる。
(20)′　今日は陸上競技だった。
(20)′′　今日は陸上競技があった。
(21)′　夏休みは今日からだった。
(21)′′　夏休みは今日から始まった。
(22)′　私は黄組だった。
(22)′′　私は黄組に属していた。
(23)′　聞き取りテストは悪い点だった。
(23)′′　聞き取りテストは悪い点を取った。

このように、誤文(19)～(23)は、うなぎ文の直訳により生じたと考えられる。よって、(19)′～(23)′のような内容の日本語を英訳する場合、(19)′′～(23)′′のように解釈し直して英訳する必要がある。

4　まとめ

以上見てきたように、Putative Passive、Extraposition の過剰般化、「－ be －型」という現象は、日本語の T-C 構造の影響により生じたとする諸研究を概観してきた。これら諸研究は、上記の3つの一見異なる現象がそれぞれ日本語の言語類型的特徴の影響を受けている点を指摘したという意味でその功績は大きい。しかし、一方で、説明不足な点や理論的に不備な点があることも本論で指摘された。今後の課題としては、上記3つの現象に対して、これまでの理論的不備を補った包括的な説明をすることや、日本語の影響以外の要因も考慮した説明を考えることが挙げられる。そのためには、これら3つの現象に絞って、学習者からのデータをさらに収集する必要がある。

英語教育への示唆としては、教師側がこれら3つの現象に対する認識を深めるということ以外は、現時点では具体的なものはない。しかし、Putative Passive に関しては、不特定 (多数) の人を表わす they、one、you、we などの日本語に直訳しにくい代名詞を英文の主語にする訂正や練習をし、能動態で表現できるものは能動態で表現させることがあげられる。これにより、受動態の誤りを避けることもでき、また英語の基本構文である SVO の定着にもなると考えら

れる。また、「ー be ー 型」に関しては、学習者がうなぎ文を直訳した場合、述語が代用される前の日本文（中間日本語のようなもの）を提示して、なぜその英文が誤りかを考えさせることも有用だと考えられる。

註

1）Li & Thompson（1976）によると言語は次の4つに分類できる。(1)主語卓越言語（インドヨーロッパ諸語など）、(2)主題卓越言語（中国語など）、(3)主語卓越・主題卓越言語（日本語、朝鮮語など）、(4)どちらでもないもの（タガログ語など）。(1)の主語卓越言語では、以下の①のように、Subject-Predicate という構造が文の構成に関して主要な役割を果たす。一方、(2)の主題卓越言語では②のように Topic-Comment という構造が主要な役割を果たす。

① John hit Mary.
Subject Predicate

② As for education, John prefers Bertrand Russell's ideas.
Topic / Comment

そして、主語卓越言語の特徴として、(1)主語は必ずしも限定的（definite）でなくてもよい、(2)主語は動詞との文法的一致を有する、(3)形式主語をもつ、などが挙げられている。一方、主題卓越言語の特徴として、(1)受動態はまれか、または、特殊な意味を持つ、(2)形式主語を持たない、(3)二重主語構文を持つ、(4)動詞が文末にくる、などが挙げられている。

この分類によると日本語は主語卓越・主題卓越両方の特性を備えていることになるが、三上（1960）は、「～は」は「題目」または「主題」と呼ばれるべきで「主語」ではないこと、また主格「が」は日本語において何ら特別な働きが見られないことから、主語廃止論を唱えた。しかし、三上は、格、意味役割、情報構造、文法機能などの諸概念を適確に区別せずに論じている（柴谷 1978; 角田 1991）。柴谷（1978）や角田（1991）は日本語の主語の機能として、尊敬語化現象や再帰代名詞化現象を誘発するなどの文法機能を挙げている。

2）柴谷（1978）は三上（1960）を基に、主題文を、その統語的役割から「代行」と「先行」に分けている。代行の主題文は、主題化規則により文中の文節的要素を取り立てたものである。例文③～⑤はそれぞれ、「太郎が花子に日本語の文法を教えた（こと）」という無題文を主題化する際に、「が」「を」「に」の部分を「は」が代行しているものである。一方、先行の主題文は、⑥や⑦のように、「主題－解説」の深層構造より派生したものである。

③ 太郎は、花子に日本語の文法を教えた。（「が」の代行）
④ 日本語の文法は、太郎が花子に教えた。（「を」の代行）
⑤ 花子には、太郎が日本語の文法を教えた。（「に」の代行）
⑥ 辞書はなるべく新しいものを買いたまえ。
⑦ 魚は鯛がいい。

3）Schachter & Rutherford（1979）によると日本人英語学習者は、他の言語（スペイン語、アラビア語、ペルシア語、中国語）を母語とする学習者よりも、作文において約 2 倍の数の Extraposition を産出したと述べている。

4）Thompson（1978）は言語を、語順の果たす役割により、Grammatical Word Order（GWO）と Pragmatic Word Order（PWO）に分けている。GWO では、主語、目的語、疑問文などの基本的な文法情報を示すために語順が用いられるのに対し、PWO では、文中のどの部分が旧（新）情報を表わすかを示すために語順が用いられる。これによると、英語は、GWO の言語であり、

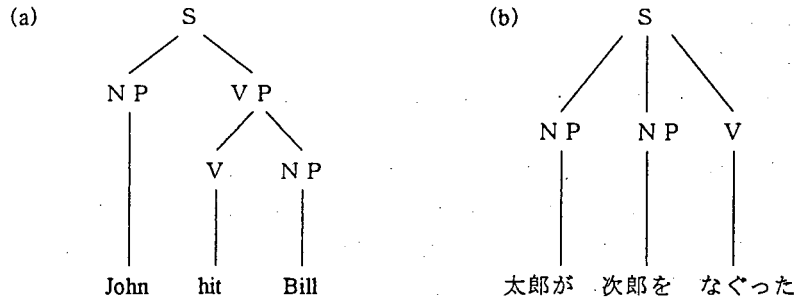
日本語は GWO かつ PWO の言語であるとされている。

5）Rutherford（1983）において、朝鮮語（動詞が文末にくる言語）を L1 とする英語学習者は Extraposition を多用したと報告されているが、量的なデータは提示されていない。

6）Rutherford（1989）では、やや異なる文脈の議論から、Extraposition の過剰表出について説明をしている。ここでは、学習者は Extraposition を用いることによって left-branching になる構造を回避しようとした、と報告されている。

7）Zobl（1989）のこの 2 つの分類は、前述した GWO の言語と PWO の言語にそれぞれ対応すると考えてさしつかえないであろう。

8）英語のように VP を形成する言語を階層型言語（a）と呼び、日本語のように平坦な構造を持つ言語を非階層型言語（b）と呼ぶ（柴谷 1985: 13）。



9）この和訳は、山岡（1995）に基づく。

10）Zobl（1989: 55）は、様々な名詞句がもつ主題性の度合いを表わす以下のような scale を提示している（和訳は、山岡（1995）に基づく）。

最も高いもの：＊I, you
＊照応代名詞
＊指示的定表現（例　Lady Di、my broker）
＊不定の特定名詞句（例　a well-known TV evangelist）
＊不定の不特定名詞句
（例　総称（lawyer）；数量を表わす名詞句（many linguists））

最も低いもの：＊非指示的名詞句
（例　慣用的名詞句（tabs）；any を用いた総称；最上級の集合から 1 つ選んだもの；場所、時間、程度を示す抽象的名詞句）

11）主題性の制約は、全ての名詞句において適応されるのではなく、we、you、they、one、people などの主題性が低くかつ日本語に訳出しにくい名詞が主語の位置にくる際に適応されると考えられる。

12）「うなぎ文」の述語代用説以外の分析に関しては、北原（1981）、安藤（1986）、奥津（1993）、野田（1996）を参照のこと。

参考文献

Chafe, W.L. 1976. Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View. In C.N. Li (ed.) 1976.

Ellis, R. 1985. *Understanding Second Language Acquisition.* Oxford. (牧野高吉 (訳) 1988『第2言語習得の基礎』 ニューカレントインターナショナル)

Ellis, R. 1994. *The Study of Second Language Acquisition.* Oxford.

Gass, S.M. & L. Selinker. 1994. *Second Language Acquisition: An Introductory Course.* Lawrence Erlbaum Associates.

Larsen-Freeman, D. & M. Long. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research.* Longman. (牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正 (訳) 1995『第2言語習得への招待』 鷹書房弓プレス)

Li, C.N. (ed.) 1976. *Subject and Topic.* Academic Press.

Li, C.N. & S.A. Thompson. 1976. Subject and Topic: A New Typology of Language. In C.N. Li (ed.) 1976.

Odlin, T. 1989. *Language Transfer.* Cambridge. (丹下省吾 (訳) 1995『言語転移：言語学習における通言語的影響』 リーベル出版)

Rutherford, W. 1983. Language Typology and Language Transfer. In S.M. Gass & L. Selinker. (eds.) 1983. *Language Transfer in Language Learning.* Newbury House.

Rutherford, W. 1989. Interlanguage and Pragmatic Word Order. In S.M. Gass & J. Schachter (eds.) 1989. *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition.* Cambridge.

Sasaki, M. 1990. Topic Prominence in Japanese EFL Students' Existential Constructions. *Language Learning.* 40/3: 337-368.

Schachter, J. & W. Rutherford. 1979. Discourse Function and Language Transfer. *Working Papers on Bilingualism.* 19: 3-12.

Thompson, S.A. 1978. Modern English from a Typological Point of View: Some Implications of the Function of Word Order. *Linguistische Berichte.* 54: 19-35.

Zobl, H. 1989. Modularity in Adult L2 Acquisition. *Language Learning.* 39/1: 49-79.

安藤貞雄 1986 『英語の論理・日本語の論理 ー対照言語学的研究ー』 大修館書店

北原保雄 1981 『日本語の世界6 日本語の文法』 中央公論社

小寺茂明 1989『日英語の対比で教える英作文』 大修館書店

久野暲 1973 『日本文法研究』 大修館書店

益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法 ー改訂版ー』 くろしお出版

松岡博信 1992 「日本人英語学習者の受動化ストラテジーに関する一考察ー義務的一致との関係についてー」 中国四国教育学会 『教育学研究紀要』 第38巻 第2部 141-146.

松岡博信 1993a 「自由英作文における主語選択の問題点ー Topic-Subject 混同を促進する要因についてー」 中国四国教育学会 『教育学研究紀要』 第39巻 第2部 144-149.

松岡博信 1993b 「日本人英語学習者の自由英作文に見られる Thematicity Constraint についてー Topic Prominence による干渉に焦点をあててー」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 No.23. 125-132.

松岡博信 1995 「英作文における日本語からの干渉について」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 No.25. 253-262.

松井恵美　1979　『英作文における日本人的誤り』　大修館書店
三上章　1960　『象は鼻が長い』　くろしお出版
野田尚史　1996　『新日本語文法選書１　「は」と「が」』　くろしお出版
奥津敬一郎　1993（第８版）『「ボクハウナギダ」の文法　ーダとノー』　くろしお出版
柴谷方良　1978　『日本語の分析ー生成文法の方法ー』　大修館書店
柴谷方良　1985　「主語プロトタイプ論」　『日本語学』　Vol.4　10月号　4-16.
築道和明　1995　「中学生の英文構造習得プロセスに関する事例研究（２）ー Topic-Comment 文の分析を中心にー」　『中国地区英語教育学会研究紀要』　No.26. 63-69.
角田太作　1991　『世界の言語と日本語』　くろしお出版
山岡俊比古　1995　『第２言語習得研究』　桐原ユニ